

対談 現代文壇史

高見 順



筑摩叢書 231

筑摩叢書 231

対談 現代文壇史

高見 順



筑摩書房

高見 順 (たかみ じゅん)

1907年 福井県に生まれる

1965年 死去

作家

著 書 「故旧忘れ得べき」「いやな感じ」
「昭和文学盛衰史」等。「高見順全
集」全20巻（勤草書房）がある。

対談 現代文壇史

筑摩叢書 231

1976年 6月20日 初版第1刷発行

著 者 高 見 順

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

電話 東京 (291) 7651 (代表)

振 替 東 京 6—4123

© 1976 A. Takama. Printed in Japan. 郵 便 番 号 101—91

1095—01231—4604

厚徳社印刷・永興舎製本

目次

白樺派とその時代（対談者 志賀直哉）	三
「新思潮」の回顧（対談者 山本有三）	二一
スバル時代の前後（対談者 佐藤春夫）	三九
わが生涯（対談者 高村光太郎）	五七
「三田文学」その他（対談者 久保田万太郎）	八四
早稲田派とその周囲（対談者 広津和郎）	一〇四
新感覚派時代（対談者 川端康成）	一二五
社会主義文学（対談者 青野季吉）	一四九
プロレタリア文学（対談者 中野重治）	一七一

新興芸術派の頃（対談者 舟橋聖一）	二八
転形期の文学者（対談者 亀井勝一郎）	二〇七
昭和十年代の作家（対談者 丹羽文雄）	二四〇
昭和の女流作家（対談者 平林たい子）	二四三
戦争と文学者（対談者 伊藤整）	二六四
戦前・戦中・戦後（対談者 大岡昇平）	二八八
作家の青春（対談者 上林暁）	三〇四
初版あとがき	三三五

対談 現代文壇史

白樺派とその時代

対談者 志賀直哉

「白樺」という名前

志賀 こないだ、どこかへいったって？

—— ええ、ビルマからインドのほうへ。

志賀 丈夫そうだね、もとに比べると。……きみ「レ・マルシャン」の話、書いたろう？ ぼくら子供の時分に、高崎弓彦というのがいてね、その兄さんがアメリカ帰りで、なかなか洒落者でね、それが銀座の函館屋の並びに「レ・マルシャン」という小さい店があった。そこで靴を拵えるんだね。弓彦も拵えるんで、ぼくも幾つか拵えたんだ。うまいけれども高いんだね。そのころ学生の編上げ靴は、二、三円だったろうと思うんだけどね、そこは八円さ。ちゃあんと木型を作ってね、今の木型とちがって、うしろへ入れて、前へ入れて、まん中へ楔型のを挿す、ああいう木

型なんぞ拵えてね、なかなかいい靴だった。それがどういうわけで「レ・マルシャン」というのか、ぼくは判らなかつたんだ。西洋人がいるわけでもないしね。だけでも、そこにぼくよか二つくらい年下のむすこがいたんだね。混血児なんだ。しばらくして、その店が無くなっちゃったんだけども、四十年以上経って、偶然なことに、新橋の近くに「べっぴんや」という靴屋があった。ぼくの妹がアメリカへいつたので、アメリカ大使館なんぞにもよく行って、アメリカ人の女に、あそこの女の靴はいいつて言われたという話で、それで、ぼくの娘の靴を、幾つかあそこで作ったことがある。兄弟でやってね、人間も非常に実直ない人達で、聞いたらね、レ・マルシャンの弟子だって。ところが、非常に若いからね、どういうんだって言ったら、つまりね、ぼくよか二つ年下の混血児、それが靴屋になっ

て、そのまた弟子なんだ。それで今でもむつかしい型がある、聞きに行くって言ってた。そいつはどこにいたのかって言ったらね、木挽町の裏店にいたんだって。それで古いお得意さんがあってね、そういう靴だけ作ってるんだって。

—— その合ノ子さんがですか。

志賀 そう。そのころ靴は十五円くらい……。

—— それはいつごろでございます？

志賀 それはぼくが奈良から東京へ出て来てたから、大東亜戦争の始まる少し前だな。その時にね、靴は高くても二十五円くらいだった、別に作らしてもね。ところが、そいつが作るやつは五十円。

—— よっぽどいい靴ですね。

志賀 月に三つくらい、お得意のを作ったりや生活できるって。そのうちに戦争が激しくなっちゃってね、とうとう「べっぴんや」も、どこかへ疎開しちやったんで、判らなくなっちゃったけどね、だけどそのむすこに聞くと、いろんな面白いことが判ったろうと思う。

—— 木挽町のほうに何かがいるということとは聞きましただけでも、レ・マルシャンのむすこという話は知りませんでした。

志賀 靴のうまいのはね、数寄屋橋の伊藤と、戦争中、革が配給制度になったんで自殺したやつがあるだろう、鈴木という、銀座から三十間堀のほうへいく道にあった。今ぼくがはいってるのは、その靴だけだね。配給の革じゃダメだって自殺しちゃった（後で聴いた話では、規格外の皮を隠していて、それで作ったというので警察に呼ばれたりしてすっかり気を腐らせて自殺したのだという事だ）。

—— 職人氣質ですね。

志賀 そいつはうまいんだよ。

—— 志賀さんは、なかなかお洒落ですね。（笑）

志賀 友達にそういうのがいたからね。

—— 洋服なんかも、やっぱり……？

志賀 「白樺」なんぞやり出してから、みんな和服。ぼくはあんまり洋服は着なかったからね。けども、学生時代はお洒落だったね。

—— 「白樺」っていうのは、あの題名、いい名前なんですが、あれはどういうことからなんですか。

志賀 あれはね、そのころ、よく日光とか赤城とか、あいう高山へいって、白樺という木が好きだった。それから「白樺」とつけたんだよ。何にしようって相談して、「表」だとか「草」だとか、いろんな候補があつてね、正

親町が「白樺」でなきややらないというんで「白樺」にき
 まったんだ。ぼくら、回覧雑誌で「白樺」というのをやっ
 てたことがあったしね。ところが、いつか武者が、「改造」
 時分の「文芸」に、「白樺」の連中が集まって山水楼で座
 談会をやった時に、そうじゃない、白と樺との色の配合が
 面白いからやったと、こう言うんだ。武者は固く信じてる
 ね。然しそんなことは絶対ないんだよ。

——それは面白いですね。他人じゃなくて、同じやっ
 てたお仲間でもって、いろいろ意見がちがって来てるなん
 て。

志賀 武者は今でもそう信じてるだろうと思うけどね、
 そんなことは絶対じゃないよ。そうして発行部数を、第一号
 を何部刷ったというのがね、こいつはぼくはあんまりハッ
 キリおぼえてないんだけど、里見と武者とで大変なちが
 いなんだよ。どっちがほんととか、こっちは知らないけど、
 名前は、白という字と樺という字を取合せるなんていうこ
 とはない。樺なんていう色は、なかなか出て来ないしね。
 それに第一、みんな白樺の木が好きだった。だけど、武者
 はそう言うんだ。

——「麦」というのがあったんじゃないですか。

志賀 里見なんかがやってた回覧雑誌が「麦」。それか

ら「桃園」というのは、中野の桃園という所に神田乃武さ
 んの別荘があつてね……。

—— 神田乃武さんて、クラウン・リーダーの、あの方
 ですね、男爵の。

「白樺」の仲間

志賀 そう。それから少し下の級に、里見とか児島（喜
 久雄）とか、そういう仲間、そのもう一つ下の級に、柳
 （宗悦）だとか萱野といつていた郡（虎彦）。郡はもう一つ
 下だったかも知れないけどね、そういうように縦に年のち
 がった仲間で回覧雑誌をやつて、お互いに見せ合つて、批
 評なんかしてた。それが一まとめになつて「白樺」をやつ
 たんだ。長与なんかは、そういう回覧雑誌時代は書いてい
 ず、あとから入つて来たのだ。

—— それは学習院の高等部の人たちで……。高等部と
 いったんですか。

志賀 そうね、高等科。うん。

—— つまり旧制の高等学校の時分ですね。ずいぶんま
 せてたな。（笑）

志賀 大学へ入る前だった。柳（宗悦）なんか、そのこ
 ろからいろんなものをよく読んでたよ。むつかしいものを。

——そうすると「白樺」というものをやろうと言われた、初めの言い出しっぺというのは？

志賀 それは武者だね。一番熱心なのは武者だった。「白樺」をやる何年か前にも、一ぺん計画したんだよ。ぼくはまあ、ゆつくりやって、集まった時に単行本でも出したい、そういったようなほうだった。武者はいくらでも書けるから毎月出なくちゃ、というほうだね。しかし武者がしきりと言うから、木下利玄、正親町、武者とぼく、四人でやることにして、口絵なんかもすつかりきめて、コロタイプ⁽¹⁾の製版なんかもしたんだ。ところが、やつぱり、とても出せそうもないんで、一ぺんやめて、それで今度は、なにしろ金も必要だからね、人数をふやして、細川護立君⁽²⁾なんかも出して⁽³⁾くれて……。

——同人じゃなくて？

志賀 細川も同人なんだよ。あんまり書かなかったけどもね。

——そうですか、細川さんも最初の同人だったんですか。

志賀 展覧会の批評なんぞは書いてたかと思うんだけども。

——それじゃ「白樺」と絵というものは、中途からじ

やなくて……。

志賀 初めから好きだった。

——細川さんなんかもうらつしやるというなら……。

それじゃ、小説をお書きになると同時に、「白樺」の仲間の人たちは絵のことも……。

志賀 それは人によって多少ちがうかも知れないけどね、自分の場合だと、ああいうものを好きだったね。絵を買うことは小説よか早かったらう。小説は読んじやいたけども、絵も一番初めはヤソ教関係の絵を見てたね。

——古いやつですか。

志賀 うん、古い昔の。

——受胎告知だとか……。

志賀 そう。新しいものも見たけども。新しいものは、大したものはないけど買ったりしてね、そのうちに有島が向うへいって、セザンヌなんか教えて来たりしてね。だから、ああいう絵は有島が帰って来てからだな。その以前は、武者がドイツ語をやった関係も一つだけど、ドイツの絵、これはドイツの理想派の絵だね、クンエルとかステュックとかそういう連中のは文学的で判りいいやね。ある意味では絵としてよりも文学みたいな所があるよ。そういうものをもつぱら……。それが有島が帰って来て、いろんな

ものが紹介されてから、武者も……。まあ、ゴッホなんか、ずいぶん早かったね。ゴッホは武者の発見だよ。そうなつてからは、だんだん、ドイツ流のそういうものは興味がなくなつて、こないだ中川一政の旅行記なんかにも、こんど旅行してみても、いいものはないがい「白樺」が紹介してる、ほとんど五十年近く前にね、その時の「白樺」の判断はまちがひなかった、そういうことでね、興味をもつて書いてたね。

「白樺」は文学運動か

——それで、級の下の方もおいでになつて、有島さんなんかもお入りになつて、勢いよく出たわけですね。その時は、今は文学史的には何か一種の文学運動を、志賀さんや武者さんたちが起したというような形になつてゐるわけですから、本当はその時の気持ちはどうだったんですか。

志賀 それはね、自然主義なんぞ不満でもあつたけれども、そう意識的にどうというほどじゃないんだね。だけれど、頭は下げない。みんな非常に傲慢な所はあつたね。それだから、たとえばロダン号を出す時に——あれはロダンが彫刻を送つて来てから、「白樺」のロダン号を出したのか、ロダン号を出してから、彫刻を送つて来て貰つたんだかど

うか忘れたけど……。

—— 浮世絵を送られた、あれですか。どっちが先きですか。

志賀 浮世絵のほうが先きですね。

—— それでロダンから来たからロダン号を出したんですか。

志賀 そうだろうな^(笑)。それでロダンというのは世界的な人だから、われわれだけでなく、ほかの人にもというので姉崎嘲風とか陽外さんとかね、姉崎さんの方は話を聞いて正親町が書いたんだけど、その時に武者が、もういいだろうって言ったよ。もうああいふ人達を頼つて雑誌を売ろうというのではないからという意味なんだ。そう言つてたよ。そんな風な傲慢な所はあつたね。(笑)

—— 陽外さんの「花子」というのは、もうその前に出てたんですか。

志賀 どっちだったろうなあ。花子の写真もその頃の向うの雑誌に出ていて、何者だろうと思つたけどね。

—— あれはいつたい志賀さんなんかのおいくつの時ですか。大事件じゃないですか、ロダンが物をよこしたなんというの。

志賀 あれは何年か知らんけども、武者なんかは少なく

とも二十代だね。ぼくらは二十代の末くらいじゃないかな。

—— 大したもんだなあ。

志賀 ぼくらと柳なんぞは六つちがいだな。まあ、ぼくらは遅れてるんだけど、柳なんか、また馬鹿に進んでね、学習院にいる時だろう、メチニコフの本なんか、靱山書店から出したんだ。なんとかいう題だった。それよかもつといいことはね、児島でも柳でも、丸善に始終借金が溜ってたんだよ。千円くらい溜ってたな。そのころの千円だからね、今の金にしたら何十万円だか判らない。また丸善も……。

—— 貸しも貸したものですな。

志賀 よく貸したもんだね。それでね、本が出たっていうことは非常にいいことだっていうんだ。家の者が認めて、借金なんぞ払ってくれるからね。(笑) 萱野なんか、ちいさいけども英語が出来てね、中学の一年の時じゃないかな、明日英語の演説会があるんで、英語で演説する、一晩で翌日の演説の原稿を書いたりしてね。そういう意味じゃ、級の下の方がいくらいだったんだ。萱野はそれがまた禍いしたんだけど。つまり日本にいてこんなことをしていてもつまらない気になって、向うへいったんだね。それでぼくが我孫子にいるころ一寸帰って来た事があって、

その時、自分の英語なんかダメだって言ってたね。

—— しかし英語のお出しになってるでしよ、芝居なんか。

志賀 そう、義朝の話とかね。だけでも、そのままじゃ、とても出せないって、やっぱり日本語で書いて英語に直して、それをまた、細君で詩なんか書く人がいるんだ、それに直してもらった、と言ってたね。

—— これは私事になりますが、私が「白樺」を初めて見たのは、大分あとになりますね、あれは明治四十三年です、創刊は。

志賀 出たのがね、うん。

—— ぼくは大正九年ごろ中学生の時に、もうずいぶん厚くなっておりました、それを初めて……。その時分はもう岸田劉生の……。私は創刊号というのは、見たことがないんです。

志賀 創刊号の表紙は児島が書いた。それから有島とか、リーチだとか、南薫造だとか……。

—— あとでございませうね、岸田劉生は。
志賀 大分あとだ。(19)

—— 「暗夜行路」と「或る男」が同じ年に出たんですね、その私が「白樺」を見てるころに、「白樺」に出ない

で「改造」の正月号に「暗夜行路」が出て……⁽¹⁾

志賀 ぼくはね、大正九年ごろは「白樺」はもう……個人的にはみんな親しかったけど、雑誌は人道主義的の何かで……。犬養（健）だとか近藤経一、ああいう連中も入って来てね。

人道主義的な色彩が

—— 倉田（百三）さんなんかも、大分あとじゃないですか。

志賀 そう、倉田はね、だいぶ……かどうか忘れたけども。とにかくいゆる人道主義の色彩が非常に濃くなっちゃって、ぼくら何んだか居心地が悪くなって来てね。

（笑）

—— 本家が母家を……。

志賀 それでだんだん離れたよ、ぼくや里見なんぞ。

—— しかし「白樺」というと、文学的にはトルストイ並びに人道主義の本家みたい、いつの間になつてますね。

志賀 それは武者が中心だからね。だから、ぼくらわざとデカダン——でもないけども、「暗夜行路」の上巻のしさいの部分で、「憐れな男」という題で「白樺」に出してやったことがあるんだよ。あれは淫売窟の話でね、そのこ

ろの「白樺」というのは、そういうのは実に少ないんだ。それでわざと「白樺」に出してやった。

—— 「暗夜行路」にそんな所、ございますか。

志賀 つまり上篇のおしさいの所だね。あそこを独立して、ほかは出来てなかったけれども、あれだけ出来てたから、出した。

—— じゃ、「白樺」の出版というのは、何か強い一つの、たとえば人道主義とかなんとかいうことで貫かれてたつていうことじゃないですね。

志賀 あかね、里見が創刊号に何か書いてるんだよ。みんなまつ黒な手習い草紙に書いてた連中が白い紙に書きたいというような要求で出さんだって、里見が書いてるよ。その程度のものだというんだね。武者はみんなが書きたいことを書くんだということを言ってる。それはいいんだけどね、里見が言うほど……。

—— 低いものでもない？

志賀 そうそう、それだけの安易な気持ちのものでもないんだよ。なぜって、それは家の者だのまわりの反対するやつを構わずにやるんだからね、相当に……。

—— 私共は犬養さん——今の犬養さんじゃありませんが、「眼白」でしたか、ああいう時の犬養さんて実に好き

なんです、あれは「白樺」系の後輩作家、「白樺」の産んだ作家っていうぐあいに考えるんです。ああいう人っていうのは、まだほかにおりましたか。犬養さんなんかは直系でしょう、学習院ですし……。

志賀 犬養なんかはそうね。

—— 倉田さんなんかは直系というわけじゃございませんね？

志賀 倉田君は、ぼくは一つも読んだことないしね。なにしろ何か一つ論文だか感想を読んで、不愉快だったしね、個人的に訪ねたこともなければ、来たこともない。ぼくはもう、倉田君のものは興味ないということはハッキリしてんだ。

—— いや、晩年じゃございませんですよ。初めから？

志賀 初めから。

—— そうですか、それは面白いな。

志賀 犬養のものもね、あれは学習院というんだけれども、われわれから見ると、すこしブルジョア趣味みたいなものがあったね、そいつはちよつと間接に言ったことがあるんだけどね、面と向って言ったわけじゃないけども。それこそ軽井沢のブルジョアの連中のことだから、そういうものを少しひけらかすって言っちゃ悪いけれども、そういう

うものが何んだかぼくら、ちよつとピッタリ来なかった。

—— 千家（元麿）さんは、あれはあとで同人になられたんですね。

志賀 ええ、同人になったろうと思うね。

—— よほどあとですね。

志賀 あれはやつぱり武者を訪ねて来た人でね、あの人はぼくは好きで、家へ行ったこともあるしね、あの人の詩は、ぼくは割りに読んでるんだ。

—— 第一詩集の「自分は見た」というのは、大正のたしか七年ですから、だいぶあとですね。あの武者さんのブツキラボウと言っちゃいけないけれども、うまく言えないな、あの率直な詩がございますね、あれと千家さんの詩と、どっちが先きでしょう。

志賀 それは武者のほうが先きは先きだろうな。千家を知らないうちに書いてたんだから。

千家元麿のこと

—— そうすると、千家さんなんかも、中途からお入りになって、「白樺」の産んだ詩人というぐあいにいいわけですね。

志賀 まあ、そうでない時代もあるんだけどね、あれな

んか柳浪さんの所へ行つてた俳句の時代があるんじゃないかな。

—— え？ どなたです。

志賀 広津柳浪。たしか、そうだと思うよ。なんとかいう俳句の名だとか言ってたな。

—— 大正に入ってからずいぶんあとまで、別の雑誌をやっておられたですね。

志賀 千家君というのは、ちょっと面白い人だったね。

—— ぼくは千家さんの詩は大好きです。

志賀 人間がまた実によかったな。ぼくは千家の晩年——でもないかもしれないけれども、「新しい村」⁽¹⁹⁾の絵の展覧会があったんだ。ぼくは雑司ヶ谷のほうへ、ぼくの婿の墓詣りにいった帰りに、家内と鶯谷まで行って……。それは戦争中でね、朝鮮人のヘンなやつが——うん、戦後だよ、アロハみたいなのを着て、ヤミ屋だね、ぼくが駒込かどこから鶯谷まで乗った電車の中で、傍若無人にやってくるんだよ。実に不愉快だった。そういうやつがみんな頭をテカテカにしてね、みんな安物だけれども、いやに新しいものなんぞ着てね。見すばらしい姿の日本人から見ると、大変ハデなんだろう、それがなんだか非常に不潔な感じがしたね。それで鶯谷で下りて武者達の展覧会へ行ったら、千

家がいたんだ。汚いワラ草履を素足にはいてね。気候はいつだったけな、もうそろそろ寒いころだ。誰かの古だろうけどね、麻のかたびらを着てるんだよ。帯をブランと下げてね。これは普通の常識でいうと、つまり乞食みたいな感じもするんだよ。ところがね、それが非常にきれいだと思つたね。非常に清らかな感じがしたな。それは前に見たヤミ屋の連中と比べたから、なおそう思つたんだらうけどね。これを武者に話したら書くと言つたが、とうとう書かなかったけどね。千家は汚い家に住んでたけど、人間は清潔な感じがあつたね。

—— ぼくは戦争中徴用になりまして、ビルマへ行っておりましてんですが、その時に何か戦場へ持つて行こうと思つて、「戦争と平和」と「暗夜行路」を持つて行つたんですよ。ところが、「戦争と平和」は読めないんです。ぼくは今だに読んでないんですけれども。それで「暗夜行路」を、戦場というあららしい所へ行つとりますとね、実にいいんですよ、ええ。それで何度も何度も読み返していたんです。あの一番しまいの所に、それまでずっと謙作で書いてあるのに、急に奥さんの……。

志賀 うん、そう。前に中村真一郎君が来て、やつぱりそのことを言ってたけどね。あれは、とにかくいるんなこ

とに束縛されるの、こっちは嫌いだからね。ところが、その前だつてあるんだよ。細君があやまちを犯した時のことというのは、細君から聞いたことを作者の描写で書いてるんだ。つまり主人公の留守中に起つたことを聞いたという……。里見のなんかはどんなに聞いていくけれども、ぼくはあいつは、とてもかなわないよ。

——「安城家の兄弟」にも、それが出て来ますね。

志賀 あいつはぼくはとてもかなわないんでね、構わず、誰が見てたか判らないようなことを書いたわけだね。最後の所も中野重治君だったか、ぼくが気がつかずに誤って書いた、というように書いてたけども、そんなことはない。こっちは充分知つてただけだけど、わざと勝手をするということにも興味があるんだよ。だけど、読んでは人はそれほど気にしないらしいな。

「暗夜行路」の描写について

—— ええ、気にしません。中に論文が入つてたり、ずいぶん勝手な小説ですから。(笑) 戦場で読んどりまして、もう十何年前になりますが、やっぱり今でも鮮やかにおぼえておりますのは、人によつておぼえてる所が、いろいろちがうんでしょうけれども、実に不思議な所をおぼえてお

りますね。ぼくは吉原の引手茶屋へ主人公が遊びにいつて、電信柱がやけに多い町だということに気づく、そういう細かい所が頭に残つております。それから汽車に乘ろうとして、思わず無意識に……。

志賀 ああ、あれね。

—— とても凄いと思つて。

志賀 あれなんか、完全にこしらえものだけども。

—— あれは凄いですね。

志賀 ぼくの友達の木下というのが、藤川勇造の所へ行つたらね、栄子っていう細君が、志賀さんという人はひどい人だつて怒つてたつて。

—— ああ、藤川栄子さんがですね。

志賀 あれに書いたことを、ぼくが細君に対してやった経験だと思つてただね。(笑) 今気になるのは、落したところからコロコロとこころがった、とやつただけだね。あれは倒れたら情性でスツといくだけで、ころがることはないだろうと思つたよ。あの時の想像は少しちがつたと思うんだけど。

—— それから謙作の放蕩時代に、鴻巣かどこかで飲んでましてね、酔つ払いの女給さんがいて、何かすると、ヒョッと眼をあくと白眼が出て来るといふような怖い所が